【特集：橋本毅彦先生ご退職記念】

橋本毅彦さんの思い出

古川 安[1]

橋本毅彦さん（普段のように「さん」付けで呼ばせてください）が定年退職を迎えると聞いて、もうそんなに年月が流れたのかと感慨を新たにした。1 世代の間隔を 10 年とすれば､橋本さんは私より 1 つ下の世代にあたる。歳は離れていても同じ科学史の研究仲間としていつも近くにいるような存在である。

橋本さんの思い出をたどることは、自分の思い出をたどることにもなる。初めてお会いしたのは 40 年近く前、橋本さんは東京大学の大学院生だった。私は米国のオクラホマ大学大学院での 5 年半の留学生活を終えて帰国したばかりだった。お茶の水で行われたある研究会の後の飲み会の席だったか、私の傍に坐っていた彼からアメリカ留学の相談を受けた。おっとりと温厚そうな好青年だった。その時の私は何を喋ったか覚えていないが、おそらくアメリカの大学の科学史教育の素晴らしさを得々と語ったのではないかと思う。

佐々木力さん編集の『科学史』（弘文堂）という本の分担執筆者の打ち合わせの会合でも顔を合わせた。そこには斎藤憲さん、伊藤和行さんら橋本さんと同世代の新進気鋭の研究者もいたと思う。橋本さんは「数学的実験物理学の誕生」と題する章を書き、ラプラスの物理学プログラムと自然像を論じた。私は「産業界の科学者たち」と題する章を書いた。本が出版されたのは 1987 年だが、その 3 年前に橋本さんは日本を発ちジョンズホプキンス大学大学院の博士課程の学生になっていた。

留学中の橋本さんを一度訪問したことがある。デラウェア州ウィルミントンにデュポン社関係の史料調査に行った帰途であったと思う。アムトラックのボルティモア駅に彼が迎えに来てくれた。タクシーに乗り込むと、滑らかな英語で運転手に行き先を告げたのを見て、「ああこの人はもうこの地に馴染んでいるんだな」と感じたことをなぜか鮮明に覚えている。大学で彼からロバート・

1　総合研究大学院大学客員研究員。

カーゴン（Robert H. Kargon）教授を紹介していただいたのは嬉しかった。私はオクラホマ大学の院生時代に、受講したいくつかの科学史セミナーで課されたターム・ペーパーに原子論史をテーマとして書いた。カーゴン先生の初期近代イギリスにおける原子論に関する名著 *Atomism in England from Hariot to Newton*（Oxford, 1966）にも大いに啓発されていたのである。その夜は橋本さんのアパートで留学生活や科学史の研究のことなどを語り合った。私もそうだが、アメリカでの留学体験は橋本さんの科学史家としてのその後の人生に大きな影響を与えたものと思う。橋本さんは帰国後もいつかアメリカの母校で教鞭をとりたかったのではないかと想像している。

橋本さんが飛行機と空気力学の歴史に関するテーマの学位論文を仕上げたのは 1991 年初めのことであった。東京大学に職を得てからは、やはり佐々木力さんが編者となった『精密科学の思想』（岩波講座『現代思想』11, 1995）の分担執筆でご一緒した。彼が「科学と技術の交流」、私が「化学におけるアメリカニズム」と題する最後の 2 つの章を担当した。その後、橋本さんはさまざまなテーマを研究し、「標準の哲学」「遅刻の誕生」「サイエンス・イコノロジー」といったキャッチーなキーワードを使った本を次々にものにしていった。図像をベースにした科学史研究は今も続けていて、最近では分子構造研究と視覚表現技法の関係を論じた好論文（『化学史研究』48 巻 1 号 , 2021）を書いている。橋本さんのスタンスに共通するのは、一つには、図像、実験装置、テクノロジーといったマテリアルなものを通してその時代の科学という営みの有り様を読み取ろうとする視座ではないかと思う。

日本科学史学会欧文誌の編集委員長を私は数年引き受けたが、2007 年から橋本さんが後を継いで 15 年間の長きにわたってその任に当たってくれた。その間、さまざまなご苦労もあったと思う。ある時、「自分が手塩にかけて編集した雑誌が刊行されると、我が子のように愛おしい」というようなことを笑顔で語ったのを覚えている。

私は佐々木さんの要請で 1988 年以降、東大の科学史科学哲学で非常勤講師としてゼミ（科学史特論など）を教えてきた。途中、在外研究や学務の都合で若干のブランクもあったが、30 年近く続けてきた。本務校の日本大学を定年退職

してからも、橋本さんのお世話で昨年度まで担当させていただいた。非常勤の身分ながら、駒場で毎年優秀な学生たちと出会い議論することで私自身も大きな知的刺激を受けてきた。その機会を与えていただいたことに大変感謝している。

研究熱心な橋本さんのことなので、退職後の第二の人生も史料探しや原稿執筆にますます精を出すのではないかと期待している。そして、これからも一緒に科学史談義に花を咲かせることを楽しみにしている。